

「いざいなん まきよう 帰去来、とど 魔郷には停まるべからず」

〔『観経疏』、七祖四〇六頁・『教行信証』、三二二頁〕

人生は、出会いと別れの繰り返しだと理屈では知っていても、こゝとに愛しい人との別れにあうと辛く悲しく、その情を抑えることはなかなかできるものではありません。それだけでなく、さらに淋しさが覆いかぶさってきて、恩愛の情は、はなはだ断ち難いものです。ことに子どもに先立たれた親の悲しさは特別です。それは経験した人にしかわからない世界です。うかつに同情じみた言葉をかけると、「あんななにかにわかりますか」ということになりません。

「御院主さん、こんなことがあつていいんじゃないか」。一年もたたないうちに事故で一人の子どもを失った父親の、やり場のない悲痛な声。「辛いもう」と、肩に手をかけるだけで、後の言葉が続かず、お念仏申すばかりでした。

また、「うらやましい。元氣な子どもさんがいる御院主さんがうらやましい」と私に言った婦人がいました。彼女は一人しかない子どもの成長だけを楽しみに生きてきた方です。子どもの時から身体が弱いので特別に手をかけてきましたから、その子どもが二十四年の人生を終えた時は激しく取り乱し、泣き叫びました。からだの筋肉が徐々に衰えてゆく難病でした。三年余り、三か月ご

とに病院から病院へと転移しました。病院を変えるごとに、子どもの状態が良い方に向かうと信じていた母親の願いもむなしく、この世を去っていったのです。

同じ年頃の青年を見るたびに、「生きていれば、うちの子もあのようにな……うらやましい」の思いが湧いたとしても、それは私たち人間の誰もが持つ避けられない現実です。「欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおほく、ひまなくして」(「一念多念文意」、六九三頁)、臨終の時まで消えないと聖人は仰せられます。

* * *



この婦人の言葉を聞いた時、五年ほど前のことがよみがえってきました。船員になっていた友人の乗っていた貨物船がフィリピンの沖で遭難し行方不明。これを知った友人一同、初盆に誘い合せて彼の家にお参りに行きました。その時、彼の母親はこのご婦人と同じ気持ちになっていたのではないか。辛い思いがさらに増すようなことになったのではないだろうか。友達が参ってくれた嬉しさよりも、むしろ淋しさが強くなったのではなからうか。一方的に、喜んでくれるに違いないという思いは、相手の気持ちを見えなくしてしまいがちです。悔やまれてなりません。



相手と同じ「目線」に立った言葉でない。「心」は伝わりません。「もしも、私がこの人の立場になったら」の「目線」です。残された親の悲しみが少しでも和らいでほしいという思いの行為でしたが、「相手と同じ目線」に立つことの大切さに気づけなかった若き日のことが今でも忘れられません。

* * *

私たちは、生き続けておれる保証はどこにもないのに、明日も必ず生きていくつもりで行動しています。しかし「われや先、人や先、今日ともしらず、明日ともしらず」（「御文章」、一二〇三頁）がこの世です。「別離の悲しみ」の場合は、縁次第で、明

日は我が身にも起りうる現実であることを教えてくれます。

故人のすがたは、この世は無常であり、悲しみと嘆き多き世であることを実感させてくれて、「歸去来、魔郷には停まるべからず」（さあ帰ろう、迷いの世界にとどまるべきではない）のお言葉が身に響きます。

先だつて逝つた者、悲しみにしずむ遺族、その悲しみを少しでも和らげてあげようとする人たちの愁嘆の思いの一切を引き受けてくださる場合は、阿弥陀さまの大悲の世界にしか私は見出せません。お念仏を聞き、阿弥陀さまの大悲の心を知らせてもらい、別れの悲しみを我が身に引き受けてゆく力をもらえばかりです。